



山村御流生け花 ひおうぎの実と二輪菊 画 山寄淑子

慶蔵院寺報

公 祭 樹

2025年10月発行

第165号

浄土宗慶蔵院

伊勢市小俣町元町1211

Tel 0596 (22) 3726

葬儀費用、なぜそんなに高いの？

ある葬儀会社の会員対象の家族葬セット最低価格は、一十二万円からとのこと。「小さなお葬式」価格と一緒にだ。しかし、それは直葬の価格で、僧侶ナシの価格。僧侶が入ってくると、直葬から葬儀価格に代わり、値段が跳ね上がる。今回の家族葬セットは別かと思いきや、会館にご遺体を搬送してもらうと、別途、安置料金三万円がいるという。棺はセットの中に入っているが、納棺のための費用が、別途五万円必要とのこと。さらに丁寧に専門的にお顔を整えてもらうと、もっと高額な別途料金がいる。棺に入れる花もセットに入っていない。御供の花を切つての対応となる。中陰祭壇を断つたら、位牌代金が必要という。葬儀で必要なお位牌が、なぜ葬儀セットの中に入っていないのかと問つと、直葬では、位牌を必要としないケースが多いからだととの説明。家族葬といつても二十二万のセットは、僧侶ナシの直葬を前提としているわけ。「小さなお葬式」と同じ。家族葬への参加の人数制限もある。十人を超えると別途料金となる。これらの契約が一気に進められる。結果、業者の説明のままに、総価格が吊り上がりいく。もともと二十二万円では何もできない仕組みになっているのだ。

今回のケースは、掛け金が二十八万円入れてあり、契約に私も入ったうえでの対応。喪主の意向もあり、掛け金にプラスすること十一万の持ち出しどなった。つまり家族葬で、頑張って交渉して三十九万円が必要となつたのだ。このことを指摘すると、掛け金を入れて「会員になつてもらつてない場合は、三十二万から始まりますから、四十九万となります」との返答。檀家の皆さん、こんなやり取りを、ご自分で、葬儀の最中に落ち着いてできますか。ほとんど葬儀社の説明のままに、契約が結ばれしていくことになるでしょう。

どうぞ事前に慶蔵院で葬儀についての意見交換をしてしっかりとした方針を決めておかれるようにおすすめします。

お葬儀ができた場合は、何時でもかまいません、最初に、慶蔵院にご連絡ください。電話 22-3726

10月の行事予定



1日(水)	写経会	午前 10時～	本堂にて
8日(水)	・羊毛フェルト教室 講師 monmo先生 ・男性詠唱隊 ・落語会「いちご亭」 南遊亭栄歌・安楽亭東風・小東風	午後 1時～3時 参加費 1500円 午後 1時半～3時 午後 7時～	一會館にて 本堂にて 一會館にて
9日(木)	ともいき英語サロン 講師 三浦邦昭先生	午前 10時～11時半 午後 1時半～3時 参加費 1回 1000円	一會館にて
13日(月)	華道「山村御流」教室 講師 小森清真先生	午後 1時半～	
15日(水)	健康教室 講師 馬場久美子先生	午後 1時～3時 参加費 500円	本堂にて
22日(水)	戦没者慰靈・平和の鐘 地蔵堂開帳・地蔵講	午前 8時頃 午後 1時半～	
24日(金)	地蔵堂の開帳 祈願とお加持	祈願は 10時、お加持は 1時～3時	
26日(日)	下小俣念仧行脚・ 第17回大念佛 別紙参照	午前 9時 慶蔵院出発～ 午後 1時～	本堂にて
10・24日(金)	茶道教室 講師 河井宗恵先生 樋口宗恵先生	午後 7時～子ども茶道教室 午後 7時半～大人茶道教室 参加費 大人 500円	一會館にて

法然上人幼少期の教え

上人は、平安末期貴族政治が終焉し、平氏による武士の政治が始まり、世の中が乱れかけた時代、長承二年（一一三三）年・崇徳天皇）久米南条郡稻岡庄（岡山県）で産されました。名は勢至丸（勢至菩薩からいただいた）と言い、父は漆間時国、盜賊逮捕、暴徒鎮圧などの治安維持のため郡毎に置かれた押領使を務める在地の豪族（武士）で、先祖をたどると仁明天皇の御子西条右大臣「源光公」の子孫だそうです。母の名は不明ですが、朝鮮半島百濟からの渡来人弓月君を先祖に持つ秦氏の家系です。（京都太秦広隆寺創建者の秦河勝も祖先）

さて、上人は幼少期にどういった教育を受けたかですが、その当時学校などが、資料らしき物はみつかりませんでしたので、私の想像ですが、平安貴族の教養の四書五経（論語・孟子・大學・中庸・書經・易經・礼記・詩經・春秋）等の漢籍、仏教經典、和歌などが考えられます。

次に、だれから教育を受けたかですが、その当時学校などなかったはずですので、教養のある両親、家庭教師の学者、縁のある寺の僧侶等が考えられます。いずれにしろ、ある年齢に達した時には漢文が白文で読み書きできていたと考えられます。白川静先生は「日本人が戦後幼稚になつたのは漢文を読まなくなつたからだ」と指摘されています。

「国家百年の計は教育にあり、生かすも殺すも教育次第」（文 麻畑公生）



住職の健康回復への道のり(44)

病気を治し、病気から快復するためには健康な身体を取りもどせばよい。あたりまえのことだ。そのためには必要なことをやる。暴飲暴食を止めて、ゆっくりよく噛んで食事をし、内臓に負担をかけない。冷たいものを避けて、お腹を温める。十分な睡眠を摂ることで、疲れを翌日に持ち越さない。息は、長く、深く吐く。半身浴で汗を出す。このことでも自然治癒力が高まる。

このようにして生活の中から健康を取り戻していくと、いつのまにか病気が消えていくばかりか、病気の予防にもなる。愚直に、健康体づくりを追求していくことが、意外と楽しそうになつてから不思議だ。石垣院長は、毎月、一時間の「予防の会」を開く。十月のテーマは「『生きもの』である人間が本当にいきたいと生きられる原則」。患者さんばかりではなく、お医者さんをはじめ、様々な分野で活動している方も参加する。前回は全盲の方が介助の方と一緒に参加を申し込まれた。

に必要なことをやる。暴飲暴食を止めて、ゆっくりよく噛んで食事をし、内臓に負担をかけない。冷たいものを避けて、お腹を温める。十分な睡眠を摂ることで、疲れを翌日に持ち越さない。息は、長く、深く吐く。半身浴で汗を出す。このことでも自然治癒力が高まる。

昭和のたづね物語

⑩

手作りのセーラー服

戦後八十年、今では考えられない物の無い時代が有りました。その時の話です。

国民学校五年生の時、学童疎開で石川県に行きました。戦後になって何もかも不足の時代となり、六年生卒業後、進学するに女子校に着て行く服がありました。叔母のセーラー服がありましたが、日焼けしていて着ていけません。戦時中の暗幕があり、これで作ることにしました。

型紙をとり、手縫いで自分でどうにか形になりました。スタートのひだが、今ひとつでしたが、がものになり、学校に着ていきました。みんなは何も言わずにみとめてくれました。

皆はどんなセーラー服を着ていたか、気にも止めませんでした。それしかないのですから…た!



(文 江崎啓子)

お便り紹介

楽しみの慶蔵院バス旅の出発です。乗り込む車内、幹事の方々息ピッタリで、飲み物やお菓子など配って頂き、子供の様にワクワク感の始まりです。

最初の尼寺興福院、歴史を感じ渡り廊下を踏みしめ本堂へ。迎えて下さる阿弥陀三尊像。皆で称える念佛も心に染み来ます。しつどりと美しい客殿では、西山厚先生による、大仏復興にかけた公慶上人のお話を伺いました。楽しく優しく面白く、すっかり西山先生に魅了されました。

次は白毫寺。極楽へと続くような長い地獄坂をやつと登つて振り返ると山門の向こうに奈良の街が広がつて見えます。宝蔵には阿弥陀如来、文殊菩薩、地藏菩薩、閻魔王が迫つてきます。万一地獄へ落ちたら心静かにし錫杖の音に耳を澄ませ、現れた地藏菩薩に救済をお願いします。

最後は山の辺の道に弘法大師創建の長岳寺。美しい鐘楼門が迎えてくれます。ご住職に地獄絵図の絵解や説法を頂きました。奈良の仏やまめぐり旅。今年も素晴らしい出会いありがとうございました。感謝

(若原容子)

バス旅行



朝の散歩

秋風がやつと吹きだしたお彼岸!お忙しい時を刻んでいらっしゃることでしょう。お元気な様子の便り、いつもありがとうございます。先生の自己管理のお力に、

菌の入るすき間がないですね。よかつた!



(写真は朝の散歩(五時出発)アカツメクサに超びつくり!私には目にしか見えません。)

(仙台市 桜井ひろ子)

安樂亭小東風(小学一年・晋之介君)
紙切り、好評です。お楽しみに!!

落語会「いづ亭」
十月八日(水) 午後七時～慶蔵院「一會館」にて
出演 法話 落語 南遊亭栄歌 安樂亭東風



(文 江崎啓子)



下記の「昔の葬式」を書いてくれた中瀬さんが書いてくれている葬儀についての記録、とても大切なものです。それぞれの地域で習俗として受け継がれ、語り継がれてきた信仰の原点がここにあります。こんなことがあった、あんなこともあったと、多くの方に、葬儀についての思い出を書き残してもらいたいと思います。よろしくお願ひします。

信仰は、
信仰じる心、
仰ぎ、くだく、
念佛は、
信仰を育て
ともに、
生きられて、く道。
木を
往生と、
格や

といふのが今日、このよ
うな地域の葬儀の形は、
急速に失われつつあり
ます。それとともに、信
仰という「心」「魂」「い
のち」「つながり」まで
もが、無縁のもの・不必
要なものと勘違いさせ
られ、日常の生活の中か
ら消滅してしまいます
な世の中になってしま
いました。このままでい
いのでしようか。田をさ
まさなければならぬ時
なのではないでしょ
うか。まだ間に合つと思
うのです。慶蔵院では地
蔵信仰を再生、復興させ
ていきたいと願つてい
ます。(二十四日お詣りく
ださい。(一ページ目の
行事予定を参照してく
ださる)

昭和五十年代頃までは、出棺前に和尚や人に念仏をしてもらひて家を出ます。墓まで三十分位和尚さんを先頭に歩きました。親戚の女人人は喪服です。孫は赤、曾孫は黄、身内は白の手拭いを肩にかけました。墓での告別式です。自宅の家で行う場合もありました。墓に行く道筋、家の前で手を合わせてくれる人もありました。

葬列の参列者は血の濃い順に、水・だんじ・写真・花(手作りの花です)いろいろ役割がありました。

四十九日が過ぎるまでは家の中で針を使ってはいけない。ボタンが取れても、外に出て付けました。亡くなつた人の旅が済むまではと聞いてあります。近所の人・知人・友人家族の協力で一通りの葬儀が終わつたら、次は身内、友人の協力で伊勢朝熊山にお参りに行きます。家の柱位の塔婆を親族の協力でお金を出し合い、朝熊山に立てもらいます。(二十人位でした)人の魂は高い山に宿ると聞いています。山の入口、極楽門をくぐると空気が一変して冷気が流れます。石原裕次郎さんのもありました。昔は山に入り、シキビをもらいましたが、今は売店で買うと思います。家に帰つたらシキビを一本ずつ近所に配りました。次は「巫女寄せ」と言って神のお告げを伝えるおばさんも家に招き、家族、親戚が集まり、亡くなつた人の思つていつた事も聞いてもらいました。

朝熊山の塔婆は五年位立ててありました。その間何度もお参りをしました。

(文 中瀬志津子)

昔の葬式 一

昭和つれづれ物語

11

